

昭和二年 (1928)

汗と涙の十五年念願の全国制覇達成
信濃路に真紅の大優勝旗

ベーブ矢島卒業し中島治康入部

三月、矢島彗安は卒業とともに早稲田大へ、小松藤吾は名古屋高等商業学校へ進み、五味栄太、中島銀市も巣立って行った。

一方で、徒歩部にいた中島治康と中村恒利を補充した。三代澤角雄は松本小時代から投手でならし、青年団野球で活躍していた。寄藤は松本中でテニスで活躍していたが、野球への思いが強く転校してきた。

第五回全国選抜中等学校野球大会 小川投手の和歌山中に完敗

三月三十日、開幕初日、四国の強豪高松中と対戦した。ベンチコーチには早稲田大の松本終吉が座った。松商は百瀬、中島の三塁打などの強打と佐藤投手の力投で、7-1と圧倒した。

四月二日、大会第四日目は紀和の強豪和歌山中と対戦した。和歌山中は昨年春の選抜大会優勝校であり、褒美の米国遠征にも出かけて、中等野球界の王者であり、優勝候補の一つである松商との戦いは、事実上の決勝戦と見られていたが、前年の優勝投手左腕小川正太郎（和歌山中―早稲田大―毎日新聞社、野球殿堂）の前に好機を生かせず、0-9で敗れた。この試合、六回途中から中島が初めての甲子園のマウンドに上がった。

【2回戦 和歌山中戦】

4	中村貞男
6	大月四郎
1	佐藤茂美
2	百瀬和夫
8	小林政重
3	田辺五平
7	中島治康
5	上條章
9	中村恒利

新進中京商を迎えて招待試合

六月二十四日、長野県体育会主催により、松本県営球場で、初めての中京商との招待試合が行われた。

中京商の開校は大正十二年で、その年に野球部も創部されている。しかし、野球部は、練習場所もなく、用具も不十分な状態のスタートだった。初代校長梅村清光は、全国制覇のためには、強豪名門チームや、先輩校の教えを乞う必要を痛感していたため、自ら松本に飛び、当時長野県の地にあって強豪チームとして並ぶものがないといわれていた松商を訪れて米澤校長に面接、折を見て是非試合をしていただきたいと懇請した。事前の手紙での熱心な要請もあり、米澤校長から承諾を得て、胸をはずませて帰校したという。

五月雨の降る中、午後四時過ぎに試合は始まった。試合は11-0で松商の快勝に終わるが、中京商はそれからめきめきと強くなり、昭和六年全国中等学校優勝野球大会に吉田正男（中京商―明治大―藤倉電線―中京商監督、野球殿堂）投手を擁して初出場で初優勝を遂げると、七年、八年と三年連続優勝の偉業を達成し、押しも押されぬ強豪になった。

部内で不協和音から練習禁止

選抜大会以降、野球部の上級生の間に気まずい雰囲気があり、それが試合にまで影響するようになった。心配した先輩校友が話をしても改まらず、「松商野球部内紛」と大きく新聞の記事にもなり、とうとう業を煮やした米澤校長は、上級生の練習を禁止してしまった。選手たちが、校長の家へいくら謝りに行っても会ってもらえず、大会も迫ってくる中、気をもんだが、ようやく許しが出て、それからはチームが一丸となって戦う体勢が出来上がった。

第六回甲信越野球大会 長野商を破り優勝

七月二十五日から長岡中グラウンドで第六回甲信越野球大会が開かれた。二十六日、1回戦は高田中を41-0の記録的大差で、二十八日の2回

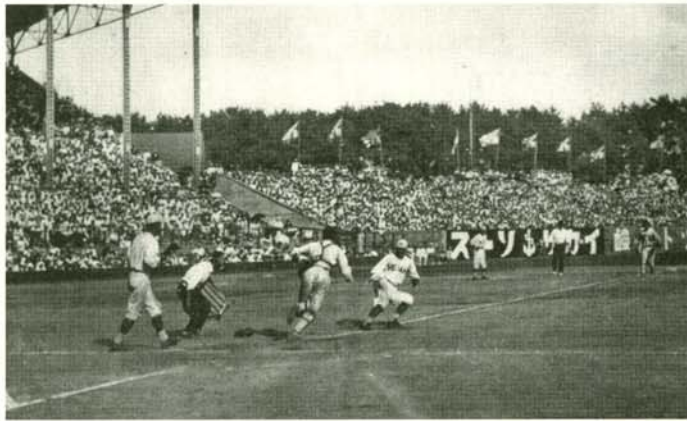
戦は新潟中を12-0で、二十九日の準決勝は長岡中を10-0で破り、三十日の決勝は長野商と対戦し、14-6で破って優勝を果たし、春に続いて甲子園出場を決めた。

第十四回全国中等学校優勝野球大会 苦節十五年、平安中を下して優勝

八月十一日、朝日新聞社会議室で行われた抽籤会で1回戦広陵中と対戦することになった。宿敵で相性の悪い広陵中とあって、松本では「広陵に勝ったら応援に行くか」という声も聞かれた。

十三日、広陵中戦は、初回1点先制されたが、二回に追いつき、四回には2点リードを奪った。そして、反撃を1点にとどめ、とうとう広陵中を3-2で下した。十六日、2回戦は鹿児島商と対戦し3-2と競り勝った。十七日、準々決勝は愛知商と対戦し、中島投手は2安打完封、5-0で快勝した。二十日、準決勝は高松中と対戦し、五回まで3-0とリードしたところで降雨中断し、回復の見込みなくコールドゲームが宣告され、松商の勝ちとなった。高松中には三原修（後に脩、高松中―早稲田大―巨人選手、プロ野球監督、野球殿堂）がおり、後に佐藤とは早稲田大で同期となる。

その日、「佐藤ですが、佐藤君はいますか」と、佐藤主将を訪ねて合宿所にひとりの男が現れた。甲子園球場のすぐ近くの鳴尾村西畑（現在の兵庫県西宮市）、通称文化村に住んでいる流行作家の佐藤紅緑だった。後に詩人・作詞家として活躍するサトウハチローや



平安中の三走伊藤次郎を刺す百瀬和夫捕手

小説家佐藤愛子の父親で、大の野球ファンで、ひいきのチームを熱狂的に応援していた。「松商の優勝を期待する。この本でも読んで、英気を養って、必ず大優勝旗を持ち帰られよ」と、評判の小説『あま玉杯に花うけて』とともに手紙を渡された。同姓のよしみで応援してくれていることに感激した。

二十二日の決勝は平安中と対戦し、3-0とリードして、最終回、平安中の攻撃は1点をあげて、さらに二死満塁の場面で、三走伊藤次郎が本盗を企て、百瀬捕手がタッチアウト。

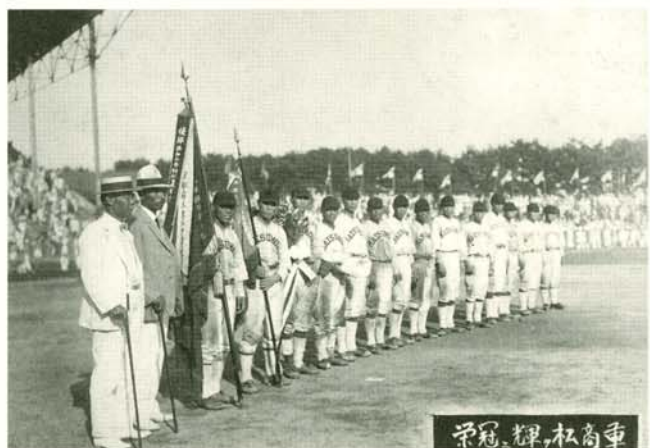
見事、創部十五年にして優勝を果たした。

佐藤茂美主将を先頭に紅の大優勝旗をかついで場内を一周する姿に、二木部長の胸にはこみあげてくるものがあった。

中島投手は、和歌山中の小川正太郎投手とともに天才投手と称されるようになった。

【決勝戦 平安中戦】

- 4 中村貞男
- 6 大月四郎
- 2 百瀬和夫
- 8 佐藤茂美
- 1 中島治康
- 3 田辺五平
- 5 村田貞男
- 7 高野百介
- 9 中村恒利



全国優勝を果たし喜びの記念写真 左から米澤校長、二木部長

歓喜の凱旋 信州松本に紅の大優勝旗がひるがえる

松商優勝の報はたちまち松本市に伝わり、町はいたるところで熱い雰囲気包まれた。松本市では直ちに歓迎の準備に着手した。

八月二十五日、大阪から東京に着くと、朝日新聞社へあいさつに向かい、明治神宮に参拝し、夜は丸の内倶楽部で今井五介翁らの長野県人会の主催する祝賀会に出席した。そして、その日の夜行列車で松本へ向かった。

八月二十六日、あたりが明るくなると、途中の駅ごとに人々が集まってきて歓迎し、祝福してくれた。松本駅前には選手を祝福し出迎える空前の人の波で埋まった。祝賀飛行機が飛ぶ下を、学校までは自動車パレードをし、祝賀会。夜は提灯行列が、松本の町の夏の夜を彩った。



大阪市内を自動車に分乗してパレード

宝塚運動協会戦 職業野球団を破る

九月九日、東京の早稲田大戸塚球場で宝塚運動協会と対戦した。

宝塚運動協会は、大正十二年の関東大震災で立ち行かなくなった日本初の職業野球団である日本運動協회를、大正十三年に、阪急の小林一三が宝塚球場を根拠地に引き受けた、日本で三番目の職業野球団であった。この年の三月二十九日、選抜大会に出場する直前に宝塚協会グラウンドで対戦し、0-5で敗れていた。しかし、全国制覇した勢いを駆って、松商は、宝塚運動協会に勝ってしまった。

一万人近くの観衆が見守る中、中島投手と山口投手の投げ合いで、同点で迎えた九回、中島が安打出ると、野選と四球で満塁とし、三ゴロで本塁

送球が打者にあたって2点、さらに失策、安打で3点を追加し、8-3で堂々勝利を収めた。宝塚運動協会は、監督の留守中に、東京で、中等学校相手に敗れたということで世評には厳しいものがあった。

御大典奉祝記念全国中等学校選抜野球大会（東京六大学野球連盟主催）

大正天皇の崩御により踐祚した昭和天皇は、十一月十日、京都御所で即位の礼にのぞまれたが、それを記念して各地で祝賀行事が開催された。

九日、全国から選ばれた八校（松商、早稲田実、関西学院中、和歌山中、広陵中、高松中、福岡中、鹿児島商）で、御大典奉祝記念全国中等学校選抜野球大会が行われた。

九日、1回戦は鹿児島商と対戦し、夏の甲子園大会2回戦に続いて、2-0で下した。十日、準決勝は高松中と対戦し、4-5で惜敗した。春の選抜大会では1回戦あたり、夏は雨中の準決勝で戦い連破した相手であったが、三度目に雪辱を許した。この大会は高松中が和歌山中を引き分け再試合の末破って優勝した。